

令和5年12月16日

西大寺を愛する会 令和5年12月度例会発表

## 西大寺八幡山城と宇喜多氏・・・宇喜多直家出世城 中間報告-2

## 『信長公記』の記録の重要性

西大寺を愛する会 丸谷憲二

## 1 はじめに

新岡山城へ、2022年11月3日OPENのHPに金山八幡山城がありません。HP原案作成の、岡山市・瀬戸内市観光連携事業実行委員会は『備前軍記』史観で公開しています。岡山市は観光振興課、瀬戸内市は文化観光部文化観光課が担当です。西大寺は金山八幡山城ではなくて金陵山西大寺観音院を紹介しています。岡山城展示を紹介します。

戦国時代の海岸線に注目です。



## 2 金山八幡山城城主 宇喜多忠家



金山八幡山城は宇喜多直家が建立し、弟の宇喜多忠家が城主でした。坂崎出羽守の父親です。

## 3 『信長公記』の八幡山城の記録

「羽柴秀吉の戦い」という視点から、天正6年(1578)5月24日から天正7年(1579)10月30日迄の記録を確認しました。前後の動向に注目しました。

西大寺八幡山城の初見は、『陰徳太平記』の西大寺八幡山城の記録です。

享保2年(1717)『陰徳太平記』「浦上宗景並宇喜多直家事」の「西大寺の八幡山には、忠家を処(お)きてけり」です。

新釈陰徳太平記

年月が経つにつれて、直家の元へは多くの武士が従ってきた。直家は備中の伊賀左衛門を婿にとり、のち毒殺して備中国を奪った。その後、作州を奪おうと思ひ、海老の城(英田郡作東町江見)にいた後藤美作守高光を窺ったところ、剛の者でなかなか討ちがたいので、直家の姉を嫁に遣わし、のち毒殺した。一説には、高光の娘を妻にしたとも言われている。それによつて作州の武士の多くは味方に降った。そこで、上山(英田郡英田町上山)の城主には延原弾正少輔を、荒神山(津山市荒神山)には花房助兵衛直次を、湯山の城(真庭郡湯原町湯本)には宇喜多平右衛

幡山(同市西大寺金山)には忠家を置いた。

「政宗が岡山の城主金光宗高と心を合わせて謀反を図っている」と讒言した。宗景は怒つて、直家に政宗、宗高兩人を討つよう命じた。直家はあるとき、政宗が岡山に出かけていき鷹狩りをしていたすきを窺ひ、夜中に岡山に押し寄せ、宗高、政宗二人を討ち取った。こうして、岡山の城には自分が移り、沼の城には舎弟春家を置き、西大寺の八幡山(同市西大寺金山)には忠家を置いた。

歎阿弥を討つて、多年の仇を返し、旧領を奪い返し、ほどなく中山を切つて沼の城に入った。直家は文武に秀でて、しばしば軍功を重ねたので、浦上はたいそう称賛して、領地なども年を追つて加増したので、のちには浦上よりもかえつて富裕になり、権勢はますます盛んになった。そのため、家中の者すべてが、みな直家の機嫌をそこねないようにして敬いへつらつた。直家は宗景の弟政宗と不和であつたので、

「政宗が岡山の城主金光宗高と心を合わせて謀反を図っている」

と讒言した。宗景は怒つて、直家に政宗、宗高兩人を討つよう命じた。直家はあるとき、政宗が岡山に出かけていき鷹狩りをしていたすきを窺ひ、夜中に岡山に押し寄せ、宗高、政宗二人を討ち取った。こうして、岡山の城には自分が移り、沼の城には舎弟春家を置き、西大寺の八幡山(同市西大寺金山)には忠家を置いた。

長船などの家臣も、若いときには夜盗などして衣食を継いでいた。戸川秀安も一度は彼らに誘われて強盗に出たが、律義の者であつたので、無益の死は避けるべきだとして思い止どまつた。備前国御野郡野殿村(岡山市矢坂本町・同東町)の富山の城主の松田は、代々にわたつて剛勇で、浦上則宗と戦火を交えていた。松田蓮昌は津高郡金川(御津郡御津町金川)にいて、備前国を支配していたので、直家は悔りがたく思ひ、彼に娘を嫁入りさせて時節を待っていた。松田の家臣に宇垣市郎兵衛、同宗右衛門という兄弟の勇者がいた。この二人を討たねば成功しないと思ひ、金川での鹿狩りに誘つたところ、市郎兵衛は他出中であり、宗右衛門だけが狩場へ出てきたのを、誰の仕業とはわからないように切り殺した。市郎兵衛にも討手を差し向けたが、行方知れずになつた。その後、金川の城を夜討ちして、松田一家を滅ぼし、その領地を横領した。富山の城主の富山某をも追い落として、忠家を入城させた。市郎兵衛もちに忠家に仕えたという。宗景の臣に中山備前守という人がいた。直家の舅で備前の沼の城(岡山市沼)にいた。彼は宗景の命令を軽視したので、宗景は直家に彼を切ることを命じた。直家は、

「舅は父と同じことです。しかしながら、命令に背くわけにはまいりません。そこで、島村歎阿弥は、自分の祖父の敵なので、これを討つて旧領を取り返すことができれば本望です。どうか、このことをお許しください。そうしたならば、中山を切りましょう」

と言つた。宗景はその望みを容れて、島村を城中に呼び寄せて、直家に討たせた。直家は島村



天正6年(1578)5月24日

天正六年(1578)「5月24日、竹中重治が言上した子細であるが、備前国中の八幡山の城主が味方になった旨を報告した。信長公は満足の意を表し、羽柴秀吉に対して黄金100枚、そして竹中重治に銀子百両が下賜された。感謝申し上げて重治は帰って行った。」

信長 45 歳

うにと命じたところ、佐久間信盛、滝川一益、蜂屋頼隆、明智光秀が申し上げるには、播磨の敵陣は地形が険しく、難所に遮られた地に要害を丈夫に構えて居陣していると聞き及んでいまずので、我らが出向き、敵地の状況を見分して報告します。それまでは出陣を猶予下さるようにと、一同が口を揃えて意見を申し上げます。戊寅四月二十九日、滝川一益、明智光秀、丹羽長秀が播磨へ向けて出陣した。

戊寅五月一日、織田信忠、織田信雄卿、織田信包、織田信孝、細川藤孝、佐久間信盛が、尾張、美濃、伊勢三箇国の軍勢を率いて出馬した。その日は郡山に泊まった。翌日は兵庫、六日には播磨国明石の隣郷、大窪という在所に陣を据えた。先陣は敵城神吉、志方、高砂に対峙し、加古川近辺に野陣を掛けた。

〔注記〕

20 東西の関所の門：織田氏と毛利氏との国境を確定する意。

五月十三日、信長公は出陣する旨の命を発したが、十一日巳の刻から雨が激しく降り、十三日午の刻まで夜日五日にわたって雨が激しく降り続き、洪水が大量に溢れ出し、加茂川、白川、桂川が辺り一面に氾濫した。都の小路という小路において、十二、十三日の両日には一つの川となつて流れ、上京の船橋の町は押し流された。水に溺れ、人が大勢怪我をし死んだ。村貞勝が新設した四条の橋が流失した。このように洪水ではあるけれども、これまで信長公が出陣すると言え、日取り日限を変更したことがないので、船を用いて出動するに違いなからうと察し、淀、鳥羽、宇治、榎島、山崎の者たちが、数百艘の船を三条油小路まで船と櫂を立てて集結した。この状況を言上すると、信長公は御機嫌良く満足げであった。

五月二十四日、竹中重治が言上した子細であるが、備前国中の八幡山の城主が味方になった旨を報告した。信長公は満足の意を表し、羽柴秀吉に対して黄金百枚、そして竹中重治に銀子百両が下賜された。感謝申し上げて重治は帰って行った。

戊寅五月二十七日、信長公は安土における大水の被害状況を視察するために下向した。松本から矢橋へ船を用い、小姓衆だけを供に連れて琵琶湖を渡った。

戊寅六月十日、信長公は上洛の途に就き、下りと同じく矢橋から船を使って松本へ上がった。

戊寅六月十四日、祇園会が催され、信長公は見物した。馬廻衆、小姓衆いずれも弓、鎗、長刀の持道具は無用であると命じたので、携行しなかった。祭見物の後、警護の御供衆を帰し、小姓衆を十人ほど連れて、直ちに鷹野へ出掛けた。雨が少し降った。その日は、近衛前久殿へ、知行都合千五百石を山城国普賢寺において進呈した。

戊寅六月十六日、羽柴秀吉が播磨から参上し、信長公から一つ一つ事細かく指示を受けた。そして策略が機能せず陣を張っていても埒が明かないので、ひとまずいまの陣を引き払い、神吉、志方へ押し寄せ攻め破り、そのうえで、三木の別所長治の構えを攻め立てるのがいいと指示した。神吉の城攻めの検使として、大津長昌、水野九藏、大塚又一郎、長谷川秀一、矢部家定、菅谷長頼、万見重元、祝重正に、番代わりで付くよう指示し、六月二十一日、信長公は京都から安土に下向した。





天正7年(1579)「10月30日

天正7年(1579)「10月30日、備前国の宇喜多直家が赦免を受けたことで、その名代として宇喜多基家が摂津国昆陽へ参上し、織田信忠卿へ謝意を表した。羽柴秀吉が取り次いだ。

信長公記 260

裸城にした。岸の砦には渡辺勘大夫が植籠っていたが、巡拜者に紛れ多田の屋形に退避したのを、事前の上申することもなく、勝手な行為であるとして生害させた。さらに、鶴塚に野村丹後が大将となつて、雑賀衆も加わつて維持していた。城兵がことごとく討死するに及んで、野村丹後が許しを請うてきたけれども、決して許さず、生害させ首を安土へ進上した。荒木村重の妹で野村丹後の後家は、伊丹城中で夫の死を聞き及んで、憂さも辛さも自身だけが受けたかのように泣き悲しみ、生きていたところで生きがいを感じることもない身であるが、このうえさらにまた、どのような愛き日を見るであろうかと、無念に思い悲嘆するありさまは、正視に耐えず哀れであった。

織田勢の諸手は四方から近々と押し詰め、物見櫓を設置し、金堀を入れて攻め寄せると、城兵は命を助けてほしいと謝罪を申し入れてきたが、許さなかつた。十月二十四日、明智光秀は丹後丹波の兩國を統治下に組み入れ、安土へ参上し信長公へ報告した。その折、織田百反を進上した。

〔注記〕  
43 統治下に組み入れ：明智光秀の丹後丹波攻略は天正三年(天正三年六月七日付朱印状「古文書」文書五一五号「公記」卷八の九月二日条)に始まり、この天正七年に終了した。

中州表  
きの事

十月二十五日、相模国の北条氏政が味方となることを表明し、六万人ほどを率いて出発し、甲斐国へ赴き、木瀬川を隔てて三島に居陣したと注進があつた。武田勝頼も甲斐国の軍勢を繰り出し、富士山の裾野の三枚橋に拠点を構え対陣した。徳川家康も北条氏政と相呼応して駿河国へ出動し、諸所において火の手を揚げ

十月二十九日、越中国の神保長住が黒草毛の馬を進上した。十月三十日、備前国の宇喜多直家が赦免を受けたことで、その名代として宇喜多基家が摂津国昆陽へ参上し、織田信忠卿へ謝意を表した。羽柴秀吉が取り次いだ。

十一月三日、信長公は上洛の途に上つた。その日は勢多橋の茶屋に泊まった。番衆、祇候の衆へ白の鷹を見せた。翌日、入京。二条御新造の普請が終了したので、禁裏へ献上する趣旨を十一月五日に奏聞したところ、直ちに陰陽博士に日取りの選定をさせ、吉日に当たる十一月二十二日に二条御新造へ誠仁親王が行啓することが決定し、その準備に取り掛かつた。

十一月六日、白の鷹を据えて、北野裏の周辺で鴉をねらつての放鷹を行った。十一月八日、東山から一条寺にかけて白の鷹を使つて、初めて狩猟の仕方を仕込んだ。九日十日の両日、一乗寺、修学寺山において鷹野が行われた。上京立充の町人より獵場に一献の差し入れがあり、信長公は町人一人一人に言葉を掛け、忝い次第であつた。

十一月十六日亥の刻、二条御新造から妙覚寺へ信長公は御座所を移した。

〔注記〕

44 行啓：皇太子などの外出をいう尊敬語。

十一月十九日、池田重成、そのほかの歴々の武將が、妻子を人質として伊丹の城に残し、尼崎の城へ参上し、荒木村重に見解を申し述べた。尼崎、花隈の二つの城を明け渡したならば、各人の妻子の助命に應ずるといふ約束を取り付けて、いずれの者も尼崎へ出向いてきたのである。伊丹を免つ折、池田重成の一首である。

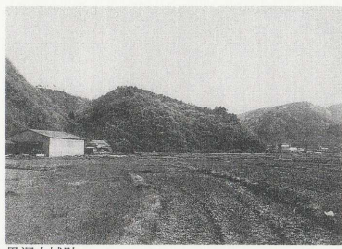
5 もう一つの八幡山城・・・明石飛驒守の居城

新釈陰徳太平記

中国勢は黒沢山からこれを見て、なぜ中村を討つたのだらうかと怪しんでいたところ、同日の夜半ごろ、明石飛驒守景親のもとより、舎弟の勘次郎がやつてきて、直家は逆意をいだき明朝に八幡山で両将を討ち取ろうとする計画であることを密かに告げた。しばらくして、直家の舎弟の忠家からも同じように連絡があつた。忠家は、直家は虚偽にみちみちた人物で、兄であるけれども対面するときはいつも膚に鎧を着込んでいたという。むかし、神武天皇が大和国を征伐

両将が黒沢山を去つた事(下巻第五七)

らを饗応するため、予定の日時にむけて山海の珍味を尽くして準備に入つた。しかし、その準備は両将を饗応するためではなくて、こと次第で元春、隆景を討ち取る陰謀であつた。その日は八月三日であつたが、同月二日の夕方に、直家の婿である作州三星(兵田郡桑作町明見)の城主中村三郎左衛門の陣に押し寄せて、一時ばかりのうちに討ち果たした。中村も勝れた勇士であつたので、敵を多数討ち取つたという。この奇襲は、中村が無二の中国方であるので、もし直家の陰謀を両将へ密告する恐れがあると疑つて討ち果たしたのである。直家は表裏虚妄の人物であるだけでなく、婿や子を罪なくして殺すなど、まことに情けを知らぬ荒夷、畜生にひとしい悪将である、のちに後ろ指をさされ、大声で罵られた。



黒沢山城址

としきりに申すので、隆景より元春のもとへその由を申し述べた。そのうち公方からも元春のもとへ南方へ出張するよう下知がなされた。元春も、隆景一人の南方出張には心もとなく思つており、そのうえに公方の命令でもあるので引き受けて、同下旬、両将は上月をたち、備前の黒沢山(赤磐郡吉井町黒沢)へ赴いた。直家は、明石飛驒守の居城の八幡山(同町仁堀中)で彼

中世山城の研究  
者である伊達教夫氏より、「もう一つの八幡山城との比較検証」との電話がありました。赤磐市仁堀中の八幡山城は『陰徳太平記』に8月3日として記録されています。毛利氏の視点から、宇喜多直家の人物像を知る重要な記録です。

## 6 まとめ

西大寺の八幡山城を知らなくて、赤磐市仁堀中の八幡山城としているブログがあります。天正7年(1579)9月4日の記録が宇喜多忠家ではなくて明石飛騨守の記録とされています。令和5年9月26日の岡山市広報連絡資料、「戦国 宇喜多家を顕彰する会 ～大河ドラマ誘致を目指して～」・・・設立総会 11月12日(日)15時～開催します。

「2 設立後の活動展開 ・NHK への大河ドラマ実現の要望活動 ・地元での機運醸成や県外でのPR活動」「3 会のメンバーとして、岡山商工会議所【地元組織】に西大寺活性化協議会も入っています。西大寺活性化協議会には『西大寺の歴史』に関心を。

現在の八幡山城城主は岡山学芸館高校の森健太郎校長です。城主としての広報活動を期待しています。

出宮徳尚氏(岡山城天守閣展示物取扱専門員)は『備前軍記』を中世城郭史の立場から間違いを指摘し、宇喜多直家の2番目の居城を金山八幡山城とされ、シーレーンとしての砂川に注目されました。

### 6.1 宇喜多直家研究の基礎史料

宇喜多直家研究の基礎史料は、毛利氏の視点からの『陰徳太平記』と織田信長の記録『信長公記』です。『信長公記』の八幡山城の記録、天正6年(1578)5月24日から天正7年(1579)10月30日迄の記録は『備前軍記』にありません。織田家の内部情報です。入手できるはずがありません。

しかし、柴田一氏(就実女子大学教授)の講演を聞いた世代は『備前軍記』です。『備前軍記』は池田家の家来の視点で、参考資料にすぎません。正確に纏めているのが市川俊介氏(元岡山市立オリエント美術館館長)の『岡山城物語』ですが西大寺八幡山城はありません。要点を紹介します。

不思議なことに直家自身は重病を理由に出陣しなかった。それは、秀吉勢の実力を知っていた直家が今度の合戦が不利と判断したからで、毛利氏から織田氏へと味方を変えようと思案していたからであろう。・・・天正7年(1579)10月、直家は織田氏の配下に入ることができたのである。

#### 毛利氏の攻勢

天正7年(1579)という年は、戦いに明け暮れした直家の一生のなかでも最も多事多難の年であった。それは毛利と和して協同作戦を行っていた直家が、突如敵対していた織田氏(羽柴秀吉)とくみしたため、怒った毛利氏が宇喜多氏に仕掛けたからである。





大敵・播磨の置塩城主（兵庫県飾磨郡夢前町）である赤松氏を滅ぼそうと考えていたからである。

時期を見ていた直家は、天正5年（1577）の春、兵を西播州（兵庫県西部地区）に進めた。部将を務めた花房職之らは各地で赤松勢と戦い、赤松氏の諸城を攻め落とす。老臣・岡平内に宇根城（赤穂市有年）を守らせ、また上月城（兵庫県佐用郡上月町）や他の城にも配下の部将を置いて守備させた。これらの戦いで、直家は播州の佐用・赤穂の両郡をも奪ったことになり、同時に領内の反対勢力も従属させることになった。

ところが戦国の世のならいで、直家にとって平和なときは訪れず、東から天下布武の織田信長の武将・羽柴秀吉が西国平定を任務にして播州に下ってきた。国中の武將たちは次々とその大軍に降参していった。姫路城を本拠にして、秀吉の西播州地区の城攻めが始まったのである。

秀吉はすぐに西播州の直家所領に侵入してきた。そこで直家は占領していた上月城に援軍を送ったが、この城は落とされてしまった。そこで8千の大軍を率いて阿閉城（加古川市別府町）を攻めたが敗れたため、その惨敗の兵を集めて上月城を攻め落とす。しかし、すぐに秀吉方の尼子勝久に上月城を奪回されたので、直家は真壁次郎四郎に上月城を攻め取ることを命じた。ところが、この戦いは備前側の大敗となってしまった。

直家は大変に立腹し、自ら出陣しようと軍勢を集めた。このニュースは上月城に伝わり、城方の尼子勢は恐れて城を捨てた。そのため、秀吉は自ら出陣して上月城を2万の大軍で押し寄せ奪った。一度は捨てた上月城ではあったが、尼子勝久は山中鹿之介の献策によって再び入城したのである。

この知らせで、直家は毛利と連合することによって城の奪回をと考え、毛利氏に協力を頼んだ。そして、毛利氏配下の小早川勢と宇喜多勢の連合軍で上月城攻撃を実現し、ついに連合軍が勝利を得た。

このとき、不思議なことに直家自身は重病を理由に出陣しなかった。それは、秀吉勢の實力を知っていた直家が今度の合戦が不利と判断したからで、毛利氏から織田氏へと味方を変えようと思案していたからであろう。

その後、直家は織田家との和睦を図ったが、なかなかうまくいかなかった。そこで、岡山城下に住んでいる秀吉と旧知の町人・小西屋弥九郎（小西行長）を使者につけ、ようやく織田信長への仲介を承諾してもらった。天正7年（1579）の10月、直家は織田氏の配下に入る事ができたのである。

の一方を破って城外に逃れたが、延原弾正らの宇喜多勢が追ってきたので観念し、隠れ坂で白害し果てた。

そのほかの宗景に属して直家に反旗を翻した美作の武士らは討ち取られたり降参したりして、宇喜多の勢力下に入った。そして直家は番勢を各城に残し、岡山に帰陣した。

直家は毛利氏の攻撃に備えて美作地区の厳重な守備を命じていたが、天正7年（1579）、毛利勢は小寺畑城（真庭郡久世町）を攻め落とし、大寺畑城（真庭郡久世町）に押し寄せてきた。さらに篠茸城（真庭郡久世町三崎）をも攻め落とし、その勢いで岩屋城（久米郡久米町北上）などを攻め取った。

宇喜多勢はみなを宮山城（真庭郡落合町）に集結させ、毛利軍の攻撃に備えていた。そこへ毛利勢は宮山城や祝山城（津山市吉見）を数日に渡って攻撃して落城させ、芸州（広島県）へ凱旋して行った。

その後、毛利氏の攻めは備前の南部に及び、小早川勢が1万5千の大軍で備前侵入を強行してきた。これを辛川（岡山市辛川）で迎えた宇喜多勢は、戸川達安（秀安の子）の勲功で毛利軍を退けた。世にいう「辛川崩れ」である。この合戦の後も、毛利の攻撃は続くことになる。

## 毛利氏の攻勢

「天正7年」（1579）という年は、戦いに明け暮れた直家の一生のなかでも最も多事多難の年であった。それは、毛利と和して協同作戦を行っていた直家が、突如敵対していた織田氏（羽柴秀吉）とくみしたため、怒った毛利氏が宇喜多氏に攻撃を仕掛けたからである。

この年の4月、美作の地で毛利の吉川元春配下の軍勢が、宇喜多諸城を次々と落としていった。8月に入ると、南の備前に毛利勢の小早川隆景は1万5千余の大軍を率いて備前から侵入してきた。これを辛川合戦で破った宇喜多勢は、次の合戦に備えて防備を固めていた。

翌8年3月（一説には7年8月）、辛川合戦の敗北に腹の虫がおさまらなかつた小早川勢は児島に出兵し、占領した。その勢いに乗じて、直家の本拠・石山城を攻略するというニュースが直家の元に届いた。

そのころ、児島の常山城を守備していたのは、直家の重臣・戸川秀安であった。小早川勢は1万余の大軍で予想通り常山城西方各地に布陣し、常山城攻めの準備を進めていた。

常山城主の戸川氏の家来はこの様子を石山城に知らせたので、直家は兵船50艘を旭川の河

## 7 参考文献

TOP | 宇喜多直家公の足跡を巡る (e-setouchi.info)

- 『訳注 信長公記』太田牛一（著）、坂口善保（訳注）武蔵野書院 2018年 p220p221 p255・p261
- 『新釈陰徳太平記』三好基之 山陽新聞社 平成2年 p112～p142
- 『新釈備前軍記』柴田一 山陽新聞社 昭和61年 p246～p249、p276 1986
- 『現代語訳 備前軍記』内池英樹 p298 2022
- 『岡山城物語』市川俊介 岡山リビング新聞社 1991 p88～p95
- 『岡山県史 第五巻 中世Ⅱ』山陽新聞 平成3年 p206～p220